



加藤財団の80年の軌跡

2022. 11. 18
加藤科学振興会創立80周年記念
公益財団法人加藤科学振興会

加藤先生が加藤科学振興会を創立されたのは1942年、先生70歳の時。それまでの先生の人生の中で、なぜ財団設立に至ったかをご理解いただくために先生のそれまでの人生をご紹介します。

加藤先生の創造性の大切さや、科学技術力向上のために注がれた熱意を感じ取って頂ければ幸いです。

今年は加藤先生がお生まれになって150年
生誕の地、刈谷市では地域の偉人の生誕150年を記念して講演会・展示会を開催

か どう よ さん ご ろう はか せ せい たん さん
加藤与五郎博士 生誕150年記念事業



刈谷市名誉市民で「フェライトの父」
ともよばれる加藤与五郎博士が、現在の
刈谷市野田町で生まれて、令和4年（2022）で150年となります。
これを記念して、与五郎博士の偉業と創造することの楽しさを広く伝
えていくために、記念事業を行います。
みなさまのご参加をお待ちしています。

与五郎博士について知ろう！

記念講演会

日時：11月6日（日） 13:30～16:00（予定）

会場：南部生涯学習センター たんぽぽ 多目的ホール

加藤与五郎博士とフェライトに深いつながりのあるお二方
お話をさせていただきます。

小学校高学年以上のお子さん
にも聞いていただける内容です。

やま ざき しんぺい 氏
山崎 舜平氏（株式会社 半導体エネルギー研究所 代表取締役）

演題 「加藤与五郎先生の教育を6年近く受けて」

おか もと あきら 氏
岡本 明氏（公益財団法人 加藤科学振興会 常務理事）

演題 「世紀の発明フェライト ～そのきっかけから現在に至る発展～」

募集人員：200名 費用：無料

申込：★事前申込（申込多数の場合は抽選）※空席がある場合は当日先着順

【申込期間：9月12日（月）～9月30日（金）】



記念講演会
申込・QRコード

◆ 特別展示 ◆

加藤与五郎博士と武井 武博士が発明したフェライト。与五郎博士の発明がどのような形で私たちの暮らしにいかされているのかを、フェライトを世界で最初に工業化した企業 TDK 株式会社にご協力をいただき、紹介します。

期間：10月18日（火）～11月20日（日） 9:00～21:00

※毎週月曜日は休館

会場：南部生涯学習センター たんぽぽ 多目的ホール前

費用：無料

お子さんにも楽しんでいただける
展示となっています。

先生が育たれた頃の時代背景

加藤先生がお生まれになった(明治5年、1872年)は、

まさに明治維新による文明開化が始まったとき

特に、科学と近代工業の夜明けの時



鉄道博物館
鉄道開業150年
特設ページ



東京国立博物館 創立150年記念
新しい一步を、あなたと。



加藤先生の生涯

- ・1872 明治 5 年に愛知県の田舎、伊佐美村野田西屋敷の農家に生れる
- ・1890(18才) 郷里の高等小学校を卒業した後、中学校の教師を目指して独学で勉強
- ・1893(21才) 京都に上り、現在の同志社大学の前身であるハリス理化学校に入学
- ・1896(24才) 仙台の東北学院の教師をしていたが、大学を卒業する必要を痛感
- ・1899(27才) 京都に上り、京都大学理学部化学科の聴講生となる
- ・1900(28才) 京都大学選科生として入学され、1903 卒業して理学士とる
- ・1900(28才) 福島県相馬市菊池家次女トラと結婚
- ・1903(31才) 米国 MIT の A. A. Noyes 教授に招かれ、研究に従事
- ・1905(33才) 帰国し、東京高等工業学校の応用化学科に奉職し、電気化学科の科長就任
- ・1911(39才) コロイド化学の研究によって理学博士の学位を受けた
- ・1917(45才) 中村化学研究所を創立して電気化学工業の開発に努力された。
- ・1929(57才) 東京高等工業学校が東京工業大学に昇格した際、電気化学科の主任教授
- ・1930(58才) 武井武博士とともにフェライトコアの発明、特許出願
- ・1939(67才) 先生の寄付により東工大に資源科学研究所が設立された
- ・1942(70才) 昭和 17 年に東工大を退官 引き続き資源化学研究所において、研究の指導
- ・1942(70才) 加藤科学振興会設立
- ・1944(72才) 同志社工業専門学校教授となる
- ・1957(85才) 軽井沢で同志社大学学生に対し第1回創造科学教育研修を行う
- ・1960(88才) 軽井沢に創造科学教育研究所を設立 若い学生創造教育に注力
- ・1967(95才) 熱海の自宅で永眠



1896年(24才) 第1回ハリス理科学学校卒業生



東北学院教授

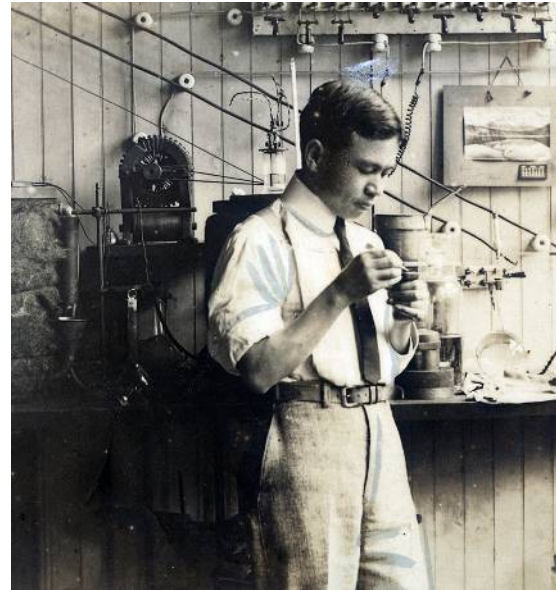


1903年(31才) 京都帝国大学学生時代

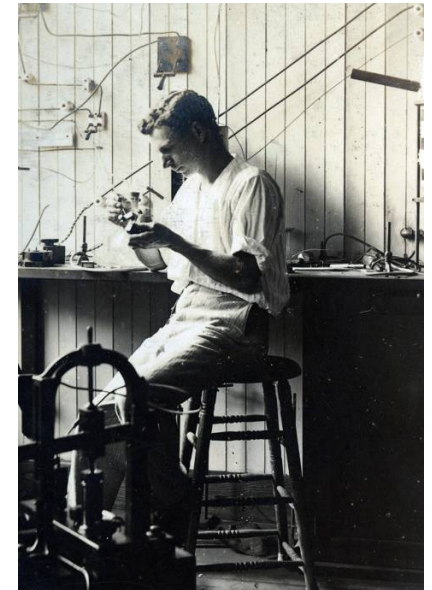
**その後の先生の生き方におおきな影響をした渡米
1903(31才)～1905年 渡米MITノイス教授の下で研究**



ノイス先生と



実験室の加藤先生



良き先輩のクーリッジ博士



ノイス夫妻とクーリッジとピクニック

加藤先生に多大な影響を及ぼしたノイス先生



A.A.Noyes 先生

ノイス先生は1866年生まれで、加藤先生より6歳年上。

1907年にMITの学長代理。

1919年にMITを退職し、カリフォルニアに移り、それからカリフォルニア工科大学を科学分野における教育と研究の偉大なセンターにすることに彼の人生を捧げた。

加藤先生著書「創造の原点」の第7章でカリフォルニア工科大学CALTECHのことを取り上げられ、“このような建学の精神が後に偉大な功績を現したことは大いに考慮すべきである”と書かれている。

CALTECHの創立が1920年、東工大が新制大学として国会で認められたのは1923年、関東大震災で遅れてしまい、実際の創立は1929年ではあるが、その頃ノイス先生と親交のあった加藤先生を通して、CALTECHの創立時のノイス先生の建学の精神が東工大の建学の根本方針に少なからず影響を与えていることは間違いないと思われる。

加藤先生が東工大に「資源科学研究所」を設立されたのも、ノイス先生がMITに半分私費で「物理化学研究所」を設立された影響であると考えられる。

東京工業大學六十年史

官立大学創立委員会に提出した

新設工業大学の根本方針



東京工業大学の建学の精神

日本ノ工業者技術者ノ仕事ガ専ラ泰西工業ノ移植ニ在ツタ時代ニハ、此種ノ工業者ヲ養成スルニ適應セル育英機關ガ必要デアツタニ相違ナイ。然レドモ今後日本ノ工業者技術者ハ獨自ノ力ニヨリ新工業ヲ開發樹立スルコトヲ要スベク、從テ此種ノ工業者ヲ養成スル事ヲ本務トスル新設工業大學ノ育英方針ハ、學生天賦ノ獨創力ヲ涵養シ專攻セル技術知識ヲ誤リナク自由ニ使ヒコナス能力ヲ附與スルニアリ、即チ根本學理ノ素養ニ重キヲ置キ之ヲ活用シテ實地ノ問題ニ關スル判斷ヲ誤ラザル實際の有能ノ技術家ヲ作ルニアル。根本ノ學理的素養ナクテハ之ガ活用即チ工業ノ實際ノ指導啓發・進歩改良ノ實現・乃至新工業法ノ發見ガ不可能ナルハ識者ノ一致シタル意見ニシテ現今各大學ガ専ラ學理ノ素養ヲ附スル事ニ嚮心シテ居ルノハ此ノ理由ニヨル。(中略)

根本的素養ノ深遠ナル學者ヲ教授トシテ育英ノ任ニ當ラシムル事ノ必要ナルハ論ヲマタザル所デアルガ、斯ノ如キ學者ノ陥リ易キ缺陷ハ、深遠ナル學理ノ討究ニ耽溺シテ工業ノ現状ニ暗ク、其研究スル所モ亦科學ノ色彩ノミ濃厚ニシテ工業ノ實際ニ縁遠キ嫌ガアルコトデアル。然ルニ新設工業大學ハ其前身タル高等工業學校時代ヨリ積年一貫シテ努力セル大方針ニ則リ、工業ノ實際トノ接觸ヲ密ニシ實地問題ヲ實際の方法ヲ以テ討究スルニ努メ、教授モ學生モ専ラ實地ニ重キヲ置ク事ヲ特色トスルガ故ニ、今後モ亦益々此特長ヲ發揮シ、教授ハ日本ノ實地工業ノ指導ヨリ進ンデ新工業ノ誘致展開ヲ目標トシテ常ニ研究ヲ進メ、學生ヲシテ此方面ノ實力ヲ備ヘシメ、斯ル方面ノ研究ヲ行フ習慣ヲ養ハシムル事ヲ眼目トシタイ。蓋シ本學ノ努ムル所ハ知識ノ注入ニ非ズシテ知能ノ啓發ニアリ。知識ノ死蔵ニ非ズシテ自由ニ活用スル能力ヲ涵養スルニアルカラデアル。幸ニ新設大學ニハ工業ノ實地ニ關スル研究ヲ進ムルニ必要ナル諸設備諸機關諸裝置ノ完備セル事他ニ其類ヲ見ザル程デアルカラ、適者良ク之ヲ使用シテ實地問題ノ討究ヲナスナラバ、日本ノ工業ヲ實際的ニ指導シテ行ク事ガ出來ルノミナラズ、大學ニハ一種ノ學風ヲ作り學生ハ其々ノ中ニ進取ノ意氣・探究ノ趣味ヲ體得シ、他日工業界ニ出ズル時ニ工場ノ各操作各機械悉ク研究ノ對象タラザルナク進歩改良止ム所ヲ知ラザルニ至ルデアラウ。

大學ハ教育所ナリ研究所ニハ非ズ、從テ大學教授ハ教育者トシテ博識ナル事ヲ要スルガ、必ズシモ研究ノ能力アル事ヲ要セズト主張スルモノガアル。此種ノ謬論ノ起ルノハ技術的知識ノ流入ヲ以テ教育ノ全般ナリト解シ技術的知識ト技術的能力トノ區別ヲ明ニスル事能ハザルニ基因スルモノト考ヘラレル。大學ハ疑モナク人材ノ教育所デアル。然シナガラ此教育トハ單ニ知識ノ貯藏者ヲ作ルト云フニ止ラズ、更ニ獨創ヲ有シ判斷力ニ富ミ、時ト場合ニヨリテハ誤ラザル解決ヲナシ得ル能力ヲ具備スルモノヲ作ル種類ノ教育デナケレバナラス。知識ハ知識ニ非ズシテ知識ノ自由ナル活用ヲナシ得ルモノデナケレバナラス。充分ナル根本的素養ヲ有シ、卒業ノ上ハ如何ナル特殊ノ工場ニ入ツテモ又如何ナル問題ニ遭遇シテモ、最短ノ時日内ニ之ヲ咀嚼含味シテ其道ノ專門家トナリスマシ解決ヲツケ得ル丈ノ素養ヲ附與セラルル事ヲ眼目トセネバナラス。此ノ如キ知識ノ自由ナル活

1930年(58才) 武井助教授とフェライトの発明



発明直後の加藤先生と武井先生

1932年に登録されたフェライトコア特許 (日本特許代98844号)

特許第九八八四四號

(昭和七年公告第二九八四號)

第一百八十九類 一、磁性物

出願 昭和五年十二月二十九日
公告 昭和七年七月二十六日
特許 昭和七年十二月十六日

(昭和八年一月二十五日發行)

明細書

酸化金屬ヲ主體トスル磁心ノ製法

發明ノ性質及目的ノ要領

本發明ハ酸化鐵ト元素選別系表第一族及第二族ノ金屬ノ酸化物ヲ主體トシ加壓ニ依リ各分子ヲ密接セシメタル後四百度以上ニ加熱スルコトヲ特徴トスル酸化金屬製磁心ノ製法ニシテ其目的トスル所ハ電氣抵抗高ク大ニシテ透磁性強ク剩磁性甚少キ輕量ナル磁心ヲ經濟的ニ製スルニ在リ

發明ノ詳細ナル説明

本發明ハ酸化鐵ト元素選別系表第一族及第二族ノ金屬元素ノ酸化物ノ一種又二種以上ノ適當ナル配合物ヲ主體トシ其加壓成形物ニ加熱スルコトニ依リ大ニ透磁性ヲ増進シテ磁心ヲ製スルヲ特徴トス

絶縁性大ニシテ透磁性アル物質ハ公知ニ屬スルモノアリ酸化鐵中ニ第一種即チ磁鐵ニ透磁性アルコト又ハ酸化鐵ト他ノ一種ノ酸化金屬トノ化合物ニ CuFeO_2 等ニ透磁性アルコトハ公知ニ屬ス然ルニ此等粉末ヲ加壓成形シタル儘ニテハ透磁性過小ニシテ到底磁心トシテ實用價值ナク從テカクノ如クシテ磁心ヲ製シテ實用ニ供スルモノハ未ダ之アラザルナリ

1935年 大学発ベンチャーとして東京電気化学工業が創立された

1935年12月7日 フェライトの事業化を目的として設立された

東京電気化学工業という社名はフェライトが発明された東京工業大学の電気化学科から命名した。 後に、TDK株式会社に社名変更

翌、1936年6月には蒲田に工場用地を取得、工場建設を行った。資金は、当時日本における最大の私企業であった鐘淵紡績から支援を受けた 1937年から生産開始

発明者



加藤与五郎博士



武井武博士

起業家



齋藤憲三

スポンサー



津田信吾
当時の鐘紡社長

加藤先生が残された、日本の科学技術向上に対する功績

- ・東京工業大学創立に際しての「建学の精神」の原案作成**
- ・産業界に対する科学技術強化に関する啓蒙活動**
- ・科学技術庁設置、科学技術基本法の成立に対する働きかけ**
- ・加藤科学振興会の設立**

加藤先生が科学技術基本法可決に向けて活動が始まる直前に、この小冊子
1000部(29ページ)を印刷し、日本の経済界のトップに配布した

国家の進歩隆盛の要素たる
創造能力の解説および達成

加藤 與五郎

経済窮地脱出の一本道

健全国策の至強有力の支柱

後進の創造能力達成法(私の体験)

創造能力の企業に役立ち方(私の実践例)

政府の科学技術基本法(呼応で成果の向上に私の努力)

畢生念願達成に奉仕

科学技術基本法成立に向けての働きかけ

TDK初創立者である齋藤憲三氏は1942年に衆議院当選、その後、加藤先生の強い影響を受け科学技術庁の創設に貢献し、初代の政務次官となる。

1960 年、閣議で「科学技術週間について」が承認され、この活動は本年63回を迎える

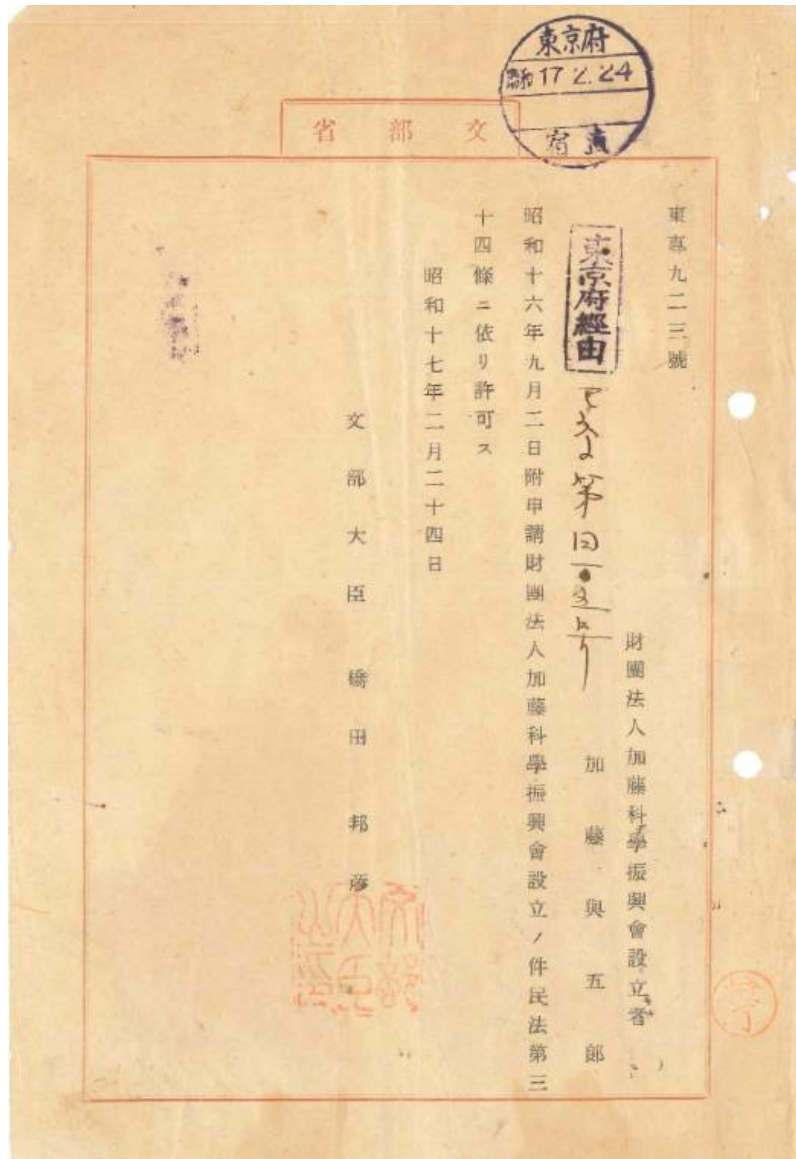
1965 年、東京大学名誉教授であった茅誠司の原案による「科学技術基本法の制定について」が佐藤栄作総理大臣に提出された。これには、加藤先生の強い思いが込められていた。

国会で審議され、科学技術基本法可決の一步手前までこぎ着けた。

しかし、科学技術基本法の制定については、科学技術庁と文部省の縄張り争いが原因で廃案となった。

1990年代になり、日本の高度成長が頭打ちになってきたため、改めて見直され、1995年にやっと可決成立した。国会で審議されてから実に30年の歳月が流れていた。

財団法人加藤科学振興会の設立



昭和17年2月24日付け
文部省の設立認定書

登記時の所在地は荏原区の
先生のご自宅

設立時期は、前年12月8日に太平洋戦争
開戦直後である。

藤山愛一郎氏からの依頼で礬土頁岩
(ばんどけつがん)からアルミニウム
を抽出する特許で30万円を受け取り、一部を
東工大の資源科学研究所の設立に、3万円を
当財団の設立資金とした。

設立趣意書

我邦が今日程國防上産業上科學ノ必要ヲ痛感セル時代ハ之ナカルベシ。特ニ科學的創造ニ依ル優秀發明發見ノ必要ノ如キハ一層痛感サル所ナルベシ。更ニ又將來我邦ガ東亞共榮圈ノ盟主トシテ世界ニ臨ムニ於テハ科學ノ劃期的振興創造ハ一層急務ト云フベシ。此時ニ當リ科學ノ振興創造ニ應分ノ努力ヲナスコトハ銃後報國ノタメ極メテ緊要ト信ズ。

不肖東京工業大學ニ在リテ多年工業ノ學術的研究ニ從事シ多數ノ發明特許ヲ得ルニ至レリ。而シテ幸ニモ其中一發明ノ如キハ一工業會社ヨリ金三十萬圓ノ報酬ヲ得ルニ至レリ。依リテ其全金額ヲ本大學ニ寄附シ一昨年同大學内ニ「資源化學研究所」ノ設立ヲ見ルニ至レリ。

其他ノ發明ニシテ種々ノ工業會社ニ於テ現ニ工業的實驗ヲナシツ、アルモノ少シトセズ。此等中遠カラズシテ相當ノ報酬ノ收得サルル見込アリ。依リテ科學ノ振興創造ノタメ右收益ノ大部分ヲ最モ有効ニ活用シ聊カ報國ニ努メ且ツ又發明ノ好記念トシテ永ク保存センタメ本會ノ設立ヲ企劃スルニ至レリ。

加藤 與五郎

(昭和十六年九月二日提出)

この趣意書が書かれたのは太平洋戦争開戦直前であり、国防上、産業上、科学技術の重要性がさらに強く認識されたタイミングであった。

加藤財団80年のあゆみ

1942	昭和17年	財団法人加藤科学振興会創立。初代理事長 加藤与五郎
1960	昭和35年	軽井沢に創造科学教育研究所を創立
1961	昭和36年	研究奨励金交付事業開始
1967	昭和42年	加藤与五郎先生永眠
1967	昭和42年	第2代理事長に佐野隆一氏就任
1971	昭和47年	加藤記念賞授賞開始
1976	昭和51年	第3代理事長に武井武氏就任
1986	昭和61年	加藤科学振興会 軽井沢研修所竣工
1990	平成2年	「創造の原点」改題11刷発行
1991	平成3年	研究集会助成金交付事業開始（令和3年度で終了）
1992	平成4年	第4代理事長に山崎貞一氏就任
1992	平成4年	研究助成金交付事業開始
1993	平成5年	創立50年記念冊子 「加藤与五郎と財団法人加藤科学振興会」発行
1998	平成10年	第5代理事長に杉本光男氏就任
2007	平成19年	第6代理事長に斎藤俊次郎氏就任
2010	平成22年	財団法人加藤科学振興会から財団法人材料科学技術振興財団へ軽井沢研修所を譲渡。登記完了。
2011	平成23年	内閣総理大臣より公益財団法人としての認定を受ける
2012	平成24年	公益財団法人への移行登記完了
2017	平成29年	創立75周年記念式典の開催
2019	平成31年	第7代理事長に谷口功氏就任

歴代理事長

初代



加藤 与五郎 東工大名誉教授、文化功労者

第2代



佐野 隆一 元鉄興社社長、勲二等旭日重光章受章

第3代



武井 武 慶應義塾大学名誉教授、文化功労者

第4代



山崎 貞一 元TDK株式会社社長、勲二等瑞宝章受章

第5代



杉本 光男 帝京平城大学名誉教授

第6代



齋藤 俊次郎 元TDK株式会社専務取締役

第7代



谷口 功 前熊本大学長、(独)国立高等専門学校機構理事長

1967年(95才) 熱海のご自宅で永眠



財団組織

理事： 8名 (1名を除き非常勤)

評議員： 9名 (非常勤)

監事： 2名 (非常勤)

事務局： 3名 (事務局長、事務局員、経理各1名 常勤)

運営資金

基本財産 約20億円の運用(20年国債の金利だけで運営)

基本財産の寄付者

- ・加藤与五郎 設立資金3万円、ご自宅、軽井沢の土地などを財団に寄付
- ・山崎貞一氏 約13億円を財団に寄付
- ・TDK株式会社 4億8千万円を財団に寄付
- ・武井武先生、山崎舜平氏も高額の寄付

加藤科学振興会の事業

公益事業

- ・研究助成金交付
- ・研究奨励金交付
- ・加藤記念賞の授与

その他事業

- ・刈谷地区の小中学校への教育助成寄付
- ・電気化学会の年会での加藤記念講演会への寄付

助成事業の目的（財団設立当時）

「我が国の産業は明治以来目覚ましい発展を遂げたが、これはいずれも外国の模倣工業である。このままの状態を将来も続けるならば、我が国はやがて先進欧米諸国の工業属国になる。貿易の自由化、とくに資本の自由化が進めば、その心配に一層強くなる」ことを加藤与五郎博士は強く憂慮された。



我が国における日本人の頭脳から出る新しい工業、日本人の発明、創造に基づく工業の発展のために、我が国の将来を担う若い創造性の豊かな研究者の育成と、創造性の高い研究のテーマ遂行に対する研究費の助成を行うことにした。

研究奨励金の交付

昔から、これはと思う学生には先生が支援をしていたが、亡くなる前の年からは財団として制度化した。

現在は、指導教員の推薦で応募してもらい、選考委員会で選ばれると30万円の奨励金が交付される

奨励金:1961年 研究奨励金事業が始まる。
開始時は同志社、日本大学の学生が対象。
その後、東工大、慶應義塾大などを加えて拡大。
2012年(平成24年)に公益財団に認定されたため、公募となった。



令和4年度研究奨励基金交付者

研究助成金の交付

電気化学、電気・電子材料を中心とする材料科学、およびそれらの関連分野において、独創的な研究、あるいは将来広く展開が期待される研究に挑戦しようとする研究テーマに対して、助成を行うものです。

1992年(平成4年)研究助成金助成金交付事業を開始。

1200万円を原資とし、選考委員会でテーマにより100～300万円の助成金を決めていたが、昨今の研究資金の減少傾向を考慮し、一律100万円を12名に交付している。



令和4年度研究助成金交付者

研究助成金交付者による成果報告会



**助成期間終了後に報告会で
成果を発表している。**



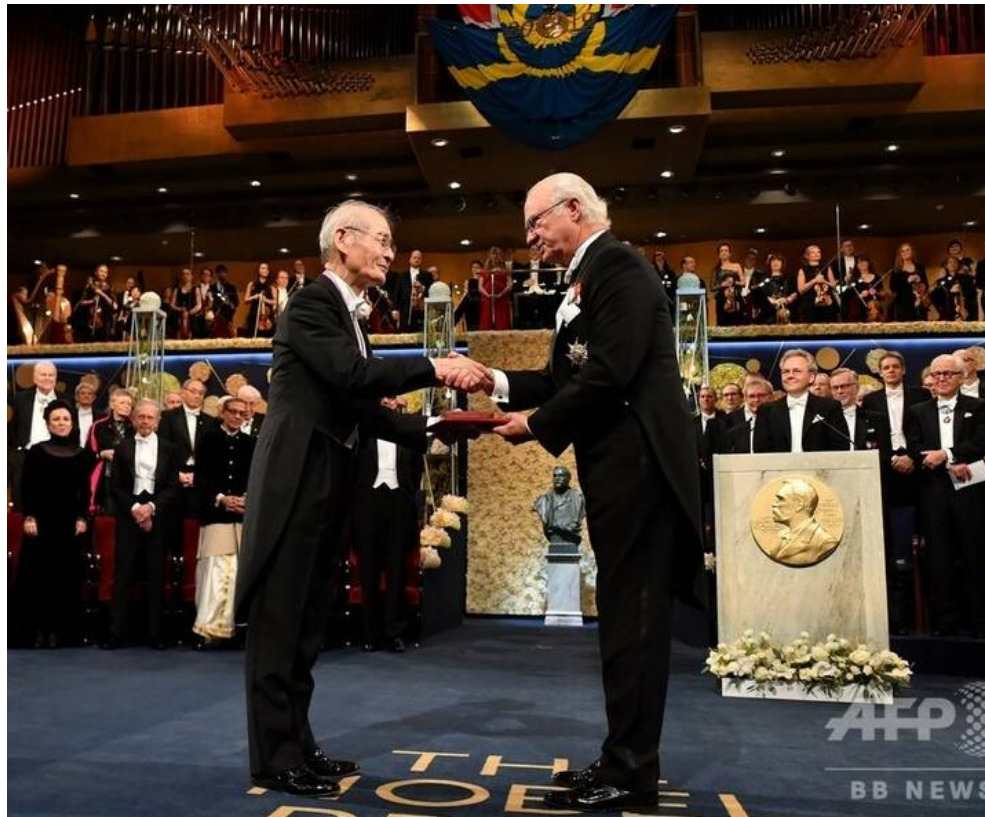
助成金贈呈式後の懇親会



加藤記念賞の授与

昭和47年からは電気化学、電子材料およびその応用方面に顕著な功績をあげた者に、加藤記念賞を贈呈することになり、すでに94名の方にこの賞（賞状と金メダル）を差し上げている。

この賞は、我が国の電気化学、材料科学の分野で顕著な業績を挙げた方に贈られ、この分野では最も名誉のある賞であると位置づけられている。



今後も加藤記念賞受賞者の中からノーベル賞受賞者が生まれる可能性は非常に高いといえる。

ノーベル賞受賞者吉野彰氏は2013年に加藤記念賞を受章

刈谷地区の小中学校への教育助成



加藤先生は生前に自身の母校の児童生徒らに奨学金を贈っていたが、没後には加藤科学振興会が、教育委員会を通して、毎年、刈谷市内の小中学校に対して毎年児童理科学研究教育資金の提供を行っている。



小学校・中学校対象を対象とした「教育実践論文(理科・生活科)」はソニー創業者の井深大氏が1959年に始めた

最優秀校	2校	刈谷市立朝日中学校	教育助成金300万円とソニー製品
優秀校	6校	刈谷市立刈谷南中学校	教育助成金50万円とソニー製品
奨励校	62校	刈谷市立小垣江東小学校 刈谷市立亀城小学校	教育助成金50万円とソニー製品

全国から161の小・中学校の応募があった
その中から70校に賞が授与された
うち4校は刈谷市から



「疑問と興味を起こさせる」、また、「科学が好きな子どもを育てる」点が評価された

日本学生科学賞とは
1957年にスタートした日本学生科学賞は、中学生、高校生を対象にした歴史と伝統のある日本最高峰の科学コンクールです。

中学の部
第65回入賞作品
(2021年)

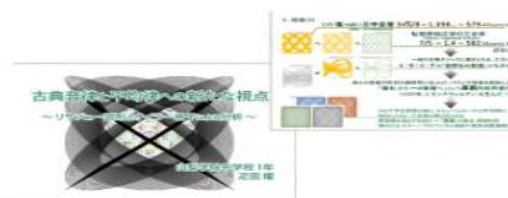
内閣総理大臣賞



オシロイバナの種の研究

赤羽 真帆
君津市立周西南中学校2年

文部科学大臣賞



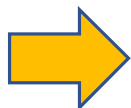
古典音律と平均律への新たな視点

疋田 権
山梨学院中学校1年



トイレットペーパーの芯の立ち上がりの研究

科学部TPC班
刈谷市立富士松中学校



これらの成果は、加藤先生が残した創造性の大切さが地域の皆さんに浸透しているためであると思われる。教育基金も一部寄与。

財団ホームページ

財団のアーカイブ、関連著書をはじめとする関係資料の閲覧ができます

公益財団法人

加藤科学振興会

Kato Foundation for Promotion of Science

ページメニュー

ホーム

新着情報

財団の概要

設立の目的

加藤博士と財団の沿革

沿革・年譜

役員

歴代理事長の略歴

定款

経緯のあらまし

事務局

加藤与五郎

加藤与五郎について

創研奨学金について

年譜

創研の原点

創研・科学・教育

加藤与五郎 人とその生涯

Noyes先生について

加藤イズムの系譜

菅原三氏との出会い

科学技術基本法と加藤

今昔物語

五重アミガハ

ホーム (トップページ)

新着情報

2022.10.1

令和5年度研究助成金および研究奨励金の交付者募集を開始いたしました。

詳細は加藤財団の助成事業をご覧ください。

2022.6.24

令和4年度 研究助成金・研究奨励金贈呈式ならびに成果報告会

令和4年6月24日に、銀座プロッサムにおいて、令和4年度研究助成金・研究奨励金贈呈式、ならびに成果報告会が行われました。

理事長挨拶



URL: www.katof.or.jp

ご静聴ありがとうございました

**今後とも、当財団に対する
御指導ご鞭撻のほどよろしく
お願い申し上げます**